

生涯にわたって運動に親しむことができる自立した生徒の育成を目指して ～目的に適した運動選択を促す体づくり運動の授業を通して～（1年次）

川口 照平

深澤 一晃

小林 早希

1. 研究主題設定の理由

（1）これまでの研究から

令和2年度からの2年間にわたり、附属四校園の研究を関連付けて進めてきた。保健体育の授業において、生徒が「主体的に学ぶ」姿の実現を目指し、ガイダンスの工夫やGIGAスクール構想による一人一台端末の活用、さらには動画撮影を授業に計画的に組み込むなどの取り組みを行ってきた。

これらの取り組みにより、授業の効率化が図られただけでなく、評価の参考資料としての活用、生徒の学習記録の保存、学習の変容の確認など、電子化による効果を実感することができた。評価方法や評価指標の作成については、今後の単元や授業の進行に応じて継続的に検討していく必要がある。

本研究では、保健体育科で育成された資質・能力が、学校生活や日常生活においてさらに活用され、生徒自身の力として定着するような指導を目指し、研究主題を「主体的に学ぶことで獲得した力を発揮できる生徒の育成」と設定した。

令和4年度からの3年間では、前研究を踏まえつつ、生徒が保健体育の授業において「主体的に学び、獲得した力を発揮する」姿の実現を目指して研究を進めた。授業づくりにおいては、全体研究との関連から「創造性」をテーマに設定し、保健体育科における「創造性」の捉え方を評価の3観点から明確化した。

これにより、生徒が「創造性」を育むための課題設定や発問の工夫、教材・教具の工夫、場の設定などについて、指導者が授業のどの場面で取り入れるかを整理しやすくなった。また、「創造性」を発揮するためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得が不可欠であることを改めて確認した。

生徒が自ら課題を見出し、その解決に向けて試行錯誤しながら主体的に取り組むことが、基礎的・基本的な知識・技能の習得につながることを、3年間の研究を通して実感した。習得した力を定着させるためには、繰り返し粘り強く取り組むことや、その力をどのような場面で活用するかを考えることが重要である。

今後も、生徒が必要を実感できるような授業づくりや、その力を活用すべき場面が授業内に設定されていることを意識した指導が求められると考える。

（2）本校の生徒の実態

本校の生徒は、意欲的に学習に取り組み、与えられた話し合い活動や課題に対して、授業者の意図を考えながら発言や記述を行う姿が多く見られる。これは保健体育の授業に限らず、他教科においても共通して見られる傾向である。一方で、自らの意見を主張する姿勢は見られるものの、他者の意見を積極的に聞いたり、参考にしたりしようとする生徒は多くない。課題を自ら見付け、解決に向けて意見を出したり、仲間の考えに耳を傾けようとしたりする姿勢よりも、授業者が設定した場面に依存して学習を進める生徒が多数を占めているのが現状である。その結果として、自分なりの視点をもって課題に取り組む姿勢や、課題解決に向けた学習のプロセスが、授業の中だけにとどまってしまう点課題である。

2. 研究の方向性

（1）教科研究について（全体研究との関わり）

令和6年度からの3年間における全体研究主題は、「自ら学びを深める生徒の育成～自立した学習者を育むための授業の創造～」である。生徒が学びを深める姿は、学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」の姿と重なるものである。

昨年度までの研究で得られた成果を踏まえ、課題を成果へと転換するためには、これまでの学びをさらに深めていく必要があると考える。自ら学びを深める姿の実現は、予測困難な時代を生き抜くために必要な力を生徒に身に付けさせる上で不可欠であり、学びの場面における「自立した学習者」の姿にもつながるものである。

「自立した学習者」という言葉を生徒の視点から捉えると、「自分で学習して自分で学ぶ人」「自分から積極的に学習する人」「自分で計画を立てて計画的に学習できる人」といったように、「自分＝自分一人で」というイメージが強

く表れる傾向がある。また、「自立した学習者」になるために必要なこととしては、「計画を立てること」「計画的に学習すること」「自分で取り組むこと」「予習や復習をすること」「勉強に向かう気持ち」など、行動面や心情面に關する要素が多く挙げられている。

中央大学文学部教授・都築学氏の著書によれば、「自立とは自分で立つことであるが、自分一人で立つことではない。誰かに支えられ、助けながら立つ。これが自立というものの本質なのだ。その意味で自立と依存は矛盾しない。自立と依存は同時に存在し、相互作用し合っているものなのだ。互いに補い合って活動する。それが、自立の本来の姿ではないだろうか」と述べられている。

一見すると「自立」は「自分一人で」という印象を持たれがちであるが、実際には「自立」と「他者との関わり」は切り離して考えることができず、これは学びの場においても同様であると考ええる。

本研究における「自立した学習者」とは、「学びの場面において、自己選択・自己決定を繰り返し、課題の解決に自ら進んで向かう者」と定義する。本研究では、生徒が自立した学習者として、個人として学びを深めると同時に、他者との協働を通じてさらに学びを深化させることができる授業の創造を目指す。

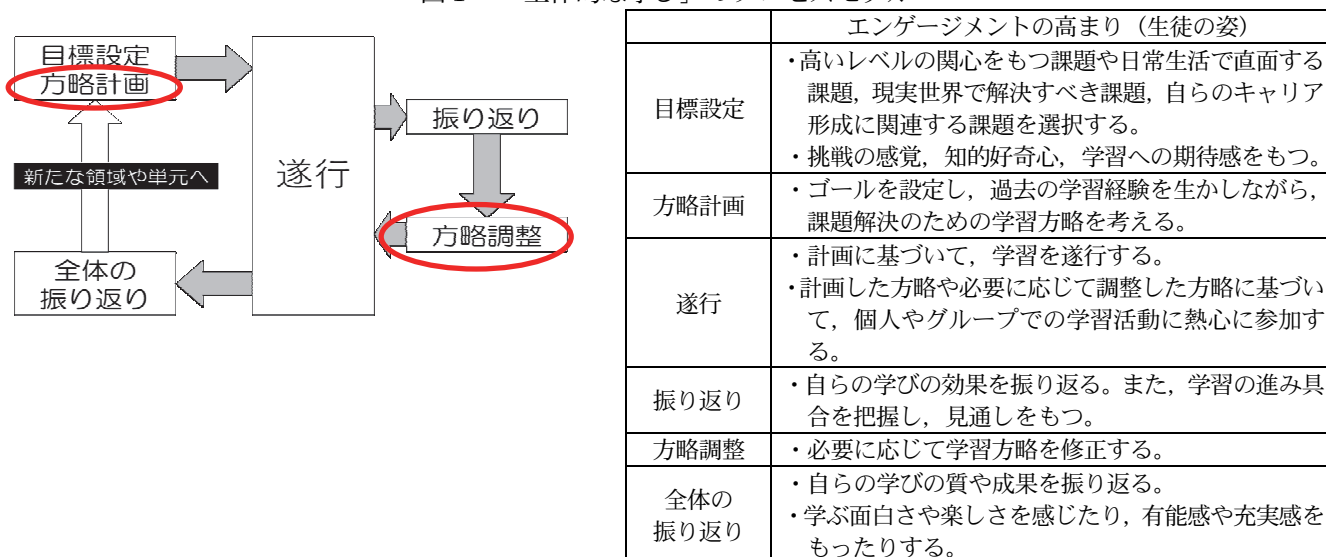
保健体育科においては、学習指導要領に示されている「心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって健康を保持・増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成」という重点を踏まえ、生徒自身が5年後、10年後の自分を想像しながら、健康や運動に関する知識・技能を正しく理解し、自己の環境や目的、技能や体力の程度に応じた適切な運動選択ができる姿の育成を目指す。

この姿こそが、教科研究の主題である「生涯にわたって運動に親しむことができる自立した生徒」であり、すなわち「自立した学習者」であると考ええる。

1年次においては、これまでの研究成果を活用し、「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした「生涯にわたって運動に親しむことができる自立した生徒」を育むための授業実践の在り方について、以下の2点に焦点を当てて研究を進める。

一つ目は、「主体的な学び」のプロセスモデルを意識した学びのサイクルの実現である。特に前研究と同様に「学習方略」に着目する。その際、各教科における「見方・考え方」が重要なポイントとなる。保健体育科における「見方・考え方」とは、運動やスポーツの価値や特性に着目し、楽しさや喜びとともに体力向上に果たす役割の視点から捉え、自己の特性等に応じた「する・みる・支える・知る」といった多様な関わり方と関連付けることである。教師はこの見方・考え方に基づき、生徒と共有すべき「学習方略」を明確にし、生徒が自らの学びの過程でそれを獲得できるよう、学習活動や指導・支援の工夫を行う。

図1 「主体的な学び」のプロセスモデル



二つ目は、学びの「場」を整える工夫である。学びの「場」とは、知識やスキルの習得、思考力や判断力の養成を目的とした場所や機会全般を指す。単元計画における各授業で、生徒が基本的な知識・技能を習得する際や学習課題に取り組む際に、「いつ」「どこで」「誰と」「何を」「どのように」学ぶのか、また「なぜそれを学ぶのか」を教師が明確にし、生徒と共有した上で、計画的に学びの場を整える工夫を行う。

具体的には、学習過程において「生徒が学習課題を選択・決定する場面」「生徒が学び方を選択・決定する場面」

「生徒が自らの学習を振り返る場面」を設定する。

さらに、様々な学びの「場」で培った資質・能力を発揮させるためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得方法に改めて着目し、生徒一人ひとりの習熟度や運動能力の差が広がらないよう、上へと引き上げていく指導方法や、集団づくり・グループ編成にも注目して研究を進めていく。

(2) 保健体育科の目指す生徒像

研究主題に基づき、保健体育科が目指す生徒像を設定した。この生徒像においては、生徒が自立的に運動に親しむ際に、自らの5年後、10年後の姿を想像しながら、健康や運動に関する知識・技能を正しく理解し、自己の環境や技能、体力の程度に応じた適切な運動選択ができる力を備えていることが求められる。

保健体育科の目指す生徒像

- 自分の課題を見出し、よりよい解決に向けて主体的に取り組める生徒
- 仲間と協働して学習を深め合うことができる生徒
- 課題解決に向けた取組で培った自立心を他のコミュニティでも発揮できる生徒

3 研究の目的

生徒がこれからの予測困難な時代を生き抜いていくためには、自ら課題を見出し、課題に直面した際に知識・技能を習得し、課題解決に向けた計画を立てることが求められる。既存の知識や経験を活用しながら、決して諦めることなく粘り強く思考し、よりよい解決方法を模索できるようになることが重要である。

その過程においては、仲間と協働して生まれたアイデアを試行し、振り返りを行いながら、課題解決に向けた計画を再構築するという学びのサイクルを実現できるようになることが望ましい。

また、心と体を一体として捉え、生涯にわたって健康を保持・増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成していくためにも、学びの場面において生徒自身が自らの5年後、10年後を想像しながら、健康や運動に関する知識・技能を正しく理解し、自己の環境や技能、体力の程度に応じた適切な運動選択ができる姿の育成を目指すものである。

4 研究の内容と具体的な内容

(1) 「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させた学びのサイクルの実現

生徒が見通し、学習活動、振り返りを具体的にイメージできるよう、「単元計画」「授業計画」「学習過程」を作成し、各単元のはじめにはガイダンスを行う。また、「主体的な学び」のプロセスモデルに示されている「学習方略」に着目し、授業の中で生徒が知識・技能を習得する際に、どのような方法があるのかを明確にする。その方法を模索する過程においては、様々な視点を生徒に与え、共有することで、「学習方略」をより良いものへと変化させる工夫を授業の中に取り入れる。

(2) 学びの「場」を整える工夫

学習過程において、「生徒が学習課題を選択・決定する場面」、「生徒が学び方を選択・決定する場面」、「生徒が自らの学習を振り返る場面」を計画的に設定していく。また、様々な学びの「場」で培った資質・能力を十分に発揮させるためには、改めて基礎的・基本的な知識・技能の習得方法に着目する必要がある。その際、生徒一人ひとりの習熟度や運動能力の差が広がらないよう配慮し、全体として上へと引き上げていくことができる指導方法の工夫が求められる。加えて、効果的な集団づくりやグループ編成にも着目しながら、研究を進めていく。